モンゴルの小中高校での公民教育に関する一考察
――カリキュラムにおける「伝統・慣習」を中心に――

Bayasgalan Oyuntsetseg

目　次

はじめに
１．研究背景と目的
２．1990年代から2010年までの公民教育の目標と課題
３．2010年以降の公民教育
４．現在の公民教育の内容構成と特質
５．むすびに

はじめに

日本の教育基本法では教育の目標として「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」、また学校教育法では「我が国と郷土の現状と歴史について、正しい理解に導き、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、進んで外国の文化の理解を通じて、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と規定され、伝統と文化を尊重する教育が挙げられている。一方、モンゴルの教育法では「知識、道徳、基礎的な体力と、人道主義精神を尊重し、自立して学習、勤労、生活できる能力を育成する」という目標を定めている。「モンゴルの伝統文化に関する知識を備え、生活の中で応用できる、人道的、民主主義的な素養をもつモンゴル人を育成する」公民教育に力を入れている。このように日本とモンゴル両国で伝統の尊重の必要性が主張されている点は共通である。日本では国語科、社会科、音楽科などの各教科等において文化や伝統を受け止め、それを継承・発展させるための教育を行っている。モンゴルでは各教科の他に、教科外活動である公民教育において「伝統」を一つの領域として位置づけ、尊重すべき伝統を明確に決めているなどの違いがある。このような両国の伝統教育の相違に着目しながら、本研究では伝統を重んじるモンゴルの公民教育の特質と課題を明確にすることを試みた。

1．研究背景と目的

モンゴルでは、近年の経済発展に伴う社会の多様化・複雑化への対応として、共有すべき価値・態度を育成する教育が重要視されてきており、2005年から教育スタンダード（日本の学習指導要領に当たる）により「主体的に社会に参画する積極性と健全な批判精神、コミュニケーション能力、思考力、表現力、問題解決能力」を養うことを学習目標とした教科外学習（総合的な学習）が始まり、2011年から新しい公民教育のカリキュラムが導入され、現代社会が直面している様々な課題を解決していくといった学びの在り方が模索されている。

しかし、「公民教育の在り方、それが有する理論的含意は何か」を問う際に、「何」を「どのように」教えるかについての共通理解や全体的な構想が明確になっておらず、そのことが公民教育を捉えにくくさせている現状がある。また、研究上の蓄積が極めて乏しく、学校教育における公民教育の在り方を分析するための包括的視座・研究枠組みが欠落しているという問題がある。

このような現状を踏まえ、本研究では「善き公民」の確立を最も追求する教科として、小中高校[1)]における公民教育の目標とカリキュラムを取り上げ、その「内容構成」、「ねらい」「背景」「課題」の側面から整理・分析し、特に「伝統・慣習」の領域を中心に、それを批判的に再構成し、公民教育の今後の展開に資することを研究目的とした。

また、本研究では公民教育の目標と内容が編成されるまでのプロセスを整理するために、公民教育を二期に区分し、その変遷について考察する。第１期は、1990年代から2010年まで、第２期は2010年から現在までである。この時期区分は、公民教育のカリキュラムの展開を基準にしたものである。

第１期は、民主化運動が始まり、民主化、多様化、個性の発達を基本理念とした新しい教育法（1991年）が発布され、公民参加に支えられた開放的で連帯性の強い社会を目標として、教科外活動としての公民教育がスタートし、学校教育のみならず社会全体において公民教育に注目が集まり始めた時期である。また、学校教育においてアイデンティティの育成を強調し、国旗掲揚（入学式等）や国歌斉唱（授業前に国家を歌う）、民族衣装を着る日を決めている学校もあり、国への誇りを持たせる指導に力を入れ始めた時期でもある。

第２期は、それまで教材もなく形式的だった公民教育を反省し、新しいカリキュラムと教材が作られた時期である。国民像の形成において、新たな論理を見いだし、その論理が民族文化に根拠をもち、国民像に特定の方向性をもたらすようになった時期でもある。伝統的な価値観を再生し、民主主義的な相互理解と合意形成に至る意志決定のプロセスを重視した新しいカリキュラムの概念は、将来の公民教育の展望を見据える重要な理念となっている。

1） モンゴルの教育制度は６・３・３制である。このうち９年間が義務教育である。本研究でいう初等教育は小学校、前期中等教育は中学校、後期中等教育は高校を言う。

2．1990年代から2010年までの公民教育の目標と課題

1990年代から国家体制[2]が変化し自由化・市場経済化への移行が進められる中で、新しい社会に生きる個々人は自由を享受するだけでなく、社会状況と価値観の変化に対応して多様性を認め合い、主体的に考え、行動する力が求められるようになった。新しい時代に生きる子どもたちに求められる資質や能力を明確にし、民主主義社会におけるモンゴル民族の生き方そのものについて、またその根底にある道徳に関わる諸問題を検討することが重要な課題となった。

一方、社会では民間団体[3]が民衆への啓蒙的な教育に取り組み、政治教育、人権、 法教育の分野で数多くの活動を行っているが、内容と構想の面で十分に練られていないため、部分的且つ単発的な内容が多く[4]、一過性的なプログラムとしての性格しか持たないものが多かった。

これらの組織のほとんどが人権の保護と、民主主義の強化を目指し、社会に対する知識、情報、高い責任感を有して、積極的に活躍する公民を育成する必要性を指摘している[5]。行政機関も教育分野を支援する目標を実現するために、国民に法律を知らしめ、再教育を行い、健康的な生活習慣、企業経営、国民の生活水準の向上に向けた研修、宣伝活動を実施している。これらの活動を通じて公民教育は新たにモンゴル人としての国民意識の形成を図っていく機能を担うことになり、さらに公民教育の果たす役割が学校教育においても大きく注目されることになる。しかし、比較研究や教材研究、授業研究などが進んでいないため、指導内容に対応できる教材がなく、教材の内容と質を改善する上で、指針となる研究報告が不十分であることが指摘されている[6]。公民教育の指導内容は偏っており、多くの場合、国家と行政制度、法律を宣伝した内容になっていると批判され[7]、民主的で「開かれた社会」の価値観および道徳的基準を公民に涵養するために、「公民と国家の関係」を公民教育の重点内容とする際に、今まで固執してきた「国家を尊重する従順な国民を育てる」[8]という従来の思想を切り捨てる決断の重要性が強調されるようになった。このような批判もあり、公民が選んで作った国家を自分たちでコントロールし、国に対し説明責任と透明性を要求し、それと同時に自分の権利、自由、他人に対して果たすべき義務を深く意識し、社会活動に積極的に参加できる公民を育てることが公民教育の目標とされるようになった。

2） モンゴルは1924年に、社会主義国の成立を宣言して以来、70年間、最高の目標である共産主義社会の建設に向けて、徹底した社会主義路線をとってきた。1980年代末、旧ソ連邦の崩壊後、東欧諸国での改革の影響を受けて民主化運動が起き、社会主義体制から議会制民主主義の体制へと移行した。1992年に、国名が「モンゴル人民共和国」から「モンゴル国」へと変更され、社会主義を放棄した。

3） 2003 年に Open Society Forum が発行した「モンゴル民間団体の一覧表」を見ると、人権、公民社会、民主主義普及に関する活動を行っている組織が63ある。

4） 政治教育アカデミー「公民・投票者教育 調査、ヒアリング調査」ウランバートル、2007年

5） 政治教育アカデミー、前掲書

6） 政治教育アカデミー「教育事情に関する調査報告書」ウランバートル、2005年

7） 第５回新生・復興民主主義国際会議の決定を実施するプロジェクト「民主主義国家の条件：モンゴル国の現状と評価」ウランバートル、2006年

8） Sh. Sukhee『モンゴル民族の伝統的な教育と発展の問題』1988年、ウランバートル、p. 47

それに伴い、子どもの生き方や生活態度の指導に力を入れ、人道的教育、人間性教育、社会性教育、コミュニケーション教育などが教育の根幹であるとの考え方のもとに「法律」、「社会認識」、「郷土」（орон нутаг）[9]、「道徳」[10]、「尊重すべき慣習・価値観」（ариун ёс）[11] などの教科が学校教育において創設された。これらの教科では、道徳的価値の指導にも配慮することが求められた。たとえば「郷土」では、生活環境、自然、歴史、文化などの理解を通じて家族愛、愛国心、連帯性、民族意識、社会性、公共性、伝統的文化を大切にする心を涵養することが目標とされた[12]。これらの教科は、①道徳に関する学問的な知識、つまり、倫理の基礎、倫理の領域、倫理の基本規則、道徳の基本概念、主要な倫理哲学者の紹介など学術的で難解な知識が中心になっている点で共通している。また、②伝統・慣習に関する知識を教えることに重点を置いている。例えば、「道徳」の教科の中で乳製品の作り方、競馬の伝統、遊牧民の移動習慣、伝統的な手芸、移動式住居の組立法、年中行事、伝統的な狩猟法などについて教えられた。この時期から民族意識の萌芽や愛国心の涵養を目的とした郷土学習が公民教育において強調されてきた。地域の一員としての自覚を持ち、地域社会に対する愛情を持つ公民を育てることが学校教育の新しい課題となった。そのほか、③基本的な生活習慣の形成・定着よりも客観的な法律に関する知識を優先し、人間の遵守すべき道徳律を法律に重ねて理解させることを重要視する傾向があった。そのため、法の内容や仕組みを中心とした知識を教授することに重点が置かれている点で共通している。

そして、2005年に新しい教育スタンダードができ、従来の知識偏重教育から人間性形成重視への移行が図られている。そこで学習の柱として「知ることを学ぶ」、「行動することを学ぶ」、「人間として生きる意味を学ぶ」、「共に社会生活することを学ぶ」という概念が掲げられた。たとえば、「存在の学習」では身体的、精神的、感情的、美的、道徳的な感覚を開発することを目標とし、児童・生徒の評価は知識、道徳、価値観、美的感覚の成長を合わせて評価することが重要であると強調されている。これは、それまで、主として知識中心の視点から行われていた生徒評価や知識編重の教育方法を改めたものである[13]。そして、人間の行動について「人間関係」、「道徳律」などの項目の中で教えている「人間と社会」[14]、「社会性」[15]、「人間と環境」[16]、「健康」[17] などが新設された。

9） 伝統的な慣習や文化に関する知識を中心的な内容とした教科である。生活基盤として子どもの日常生活と結びついている郷土に関する知識を教えて、子どもにより良い生き方を身につけさせることを目的としている。

10） 5年生のみを対象とする教科であった。中世から近代に至るまでの代表的な倫理学の理論、倫理学の起源、研究領域、基本規則、基本概念、倫理学研究者の紹介など、学術的な知識が中心内容となっている。また、伝統的な慣習に関する知識を教えることに重点を置いている。例えば、乳製品の作り方、競馬の伝統、遊牧民の移動習慣などである。

11） 伝統的な祭りの決まり、人間尊重、先生と生徒の関係、生徒規則、家庭で守るべきもの、本を大切にする意味、子どもに関する慣習（子どもに名をつける慣習等）、正しい言葉づかい、勤労に関する習慣（勤労の意義）、人間尊重、伝統的な挨拶の仕方、衛生管理、伝統的な住居に関する習慣、伝統的な遊び、自然保護に関する習慣、食文化、家畜の年齢を歯・毛で判断する方法等、芸術・伝統的な手芸、家族の慣習、愛国心、伝統的な格言などについて教えている。B. Galbaatar『尊重すべき規則』（ariun yos）小学校第3および第4学年用教科書、Ikh nirun 出版、1997年

12） モンゴル教育文化科学省『初等中等教育スタンダード』Sod-press 出版、ウランバートル、2003年、p. 16

13） モンゴル教育文化科学省『初等中等高等教育スタンダード』Sod-press 出版、ウランバートル、2003年、p. 14

新しい教育スタンダードの特徴は、教科外指導を学校教育の重要な領域に位置づけたことである。これは公民教育という面からも大きな前進である。教科外指導には、「学校の調整時間」、「総合学習」、公民教育という三つの領域がある。ここではじめて公民教育という概念が学校教育に持ち込まれたのである。しかしながら、統一したカリキュラムがなく、具体的な事例を含む教材や手引きも少なく、指導方法の不統一、実践経験の不足、教師用手引きや教材がないことなどの理由から、所期の目的を達成するに至らず、多くの学校では公民教育の授業時間を補充授業、復習、掃除、学級の会議に充てているのが現状であった。1990年代以降の公民教育の上記の展開を分析すると、以下の三点を指摘できる。

第一に、社会体制の改革と価値観の多様化に伴い、青少年の公共心や規範意識の希薄化が議論される中、公民教育の重要性が急激に上昇しているものの、学校教育におけるその在り方を展望する学問的研究に基づいた分析視点が見過されていることである。

第二には、国家や行政組織、法制度などの政治概念の学習や、社会におけるその保障というような「政治に参加する実践力」、「法律の知識」の視点が強調されたことに対する批判が高まったことである。

第三には、公民教育に関する教師の認識や指導法が統一されておらず、その理念のみならず、公民教育指導法全般に対して、現状分析を行う必要性が生じていたことが挙げられる。つまり、この時期最大の特徴は、教育方法とセットになったカリキュラムという視点が欠けていたことにある。どのような方法を通して、教育目標として掲げている思考の論理性、根拠をもった批判的思考力、生きる力を育てるという目標を達成するのかという道筋が明確ではなかったのである。

3．2010年以降の公民教育

モンゴル国大統領の2010年第103号令により、モンゴルの伝統的な思想、文化的価値、習慣を尊重し、これらを実生活で活用し、次世代へつなぎ発展させる人を育てるべく、普通教育学校[18]における公民教育用必修科目として「モンゴルの伝統的な思想、陰陽の基

14）「私たちの生活と文化の環境」、「法令」、「権利・義務」、「行政機関」について教授している。「私の生活と文化の環境」という領域で自分について、家族、親、親戚、友達、隣家、自分の家系、学校、集団、区、市、県、地域の社会、文化、生活、誇りに思う人間、さらに、社会秩序、法令、規則に関する一般的な知識、子どもの権利、義務、地方の行政機関の活動について教授している。

15）自分の住んでいる社会、個人として社会および文化活動に積極的に参加する方法、社会関係に関する正しい知識、道徳、法令、権利・義務、行政機関について教授しており、「社会化に関する認識」、「道徳律」、「法令・規則」、「権利・義務」、「政府組織」の五つの領域から構成される。

16）基礎教育課程の改革で６歳児からの入学により新設された教科である。この教科は社会や周りの環境、学校や家庭・社会における生活態度、また人間の行動が人間関係、自然環境、健康にどのような影響を与えるのかについて教授する。

17）健康を身体のみならず精神的と社会的健康という総合的な概念において取り扱っており、「健康的な身体」、「健康的な人間関係」、「健康的な環境」という三つの領域から構成されている。

18）モンゴルでは12年制の小中高一貫教育を行う学校が多く、「普通教育学校（複合学校）」と呼ぶ。日本と違って「複合学校」の中に小中高校が全部入っていることが多く、同じ校舎で小学生も高校生も勉強している。例えば、中学校１、２、３学年と言わずに、それぞれ７、８、９学年と呼ぶ。また、高校１、２学年は、11、12学年というように教育スタンダードに位置づけられている。

礎」教科（Монголын уламжлалт сэтгэлгээ、арга билгийн ухааны үндэс）のカリキュラム案が出された。「陰陽」とは、モンゴル語で「方法」と「知恵」をあらわしている。この新しいカリキュラム案こそは、公民教育の内容が法律的・政治的なものから文化的なものへと変化しはじめたことを象徴するものであった。また、このカリキュラムは初等教育から後期中等教育まで一貫したものであり、現在の公民教育に大きな影響を与えている。そこで、現在の公民教育について述べるにあたって、この2010年に出された「モンゴルの伝統的な思想、陰陽の基礎」教科の特徴をまとめておきたい。

2010年5月、大統領室内の公民公開室（Citizens'Hall/Office of the President of Mongolia/）で「モンゴルの伝統的な思想、陰陽の基礎」教科のカリキュラム案が紹介され、モンゴル国立大学やモンゴル教育大学など多くの教育機関が参加し意見交換を行っている。同カリキュラム案は「モンゴル人の伝統的な思想」、「伝統的な知恵」、「伝統的な習慣」という領域から構成された。たとえば、初等教育課程において「モンゴル人の伝統的な思想」では善悪の判断、罪と善行、忠実と正義、他者からの恩恵に感謝する心など、「伝統的な知恵」では自然環境の保護に関する知恵、人道主義的な見地（自己を知ること、自己分析、自己啓発、自己の行動を管理し、心をみつめる意味など）、「伝統的な習慣」では伝統的な祭礼、遊び、宗教的祝祭など人間成長と社会性（父母愛、氏族愛など）について教授する。

これらのうち、カリキュラム案を検討する上で一番議論が激しかった項目は「伝統的な習慣」に関する領域である。具体的には、宗教儀式、宗教的祝祭、「天」[19]を崇拝する思想（「九九天」[20]、モンゴル民族は天から生まれているという概念）、「小五明」における占術（良い・悪い方角、災厄除けの儀式[21]など）などがその議論の対象となった。

この教科は小学校第1学年から第6学年まで合計420時間で計画されていた。上記の公民公開室がホームページで公開している「意見集」[22]には多くの研究者のコメントがまとめられている。これらのコメントは、伝統的な価値を再生させ、今後のモンゴル社会を民主的で人間性豊かな社会の建設へと向けるには、伝統的な教育方法を用いて人格形成を行うことが重要な課題であると強調している。しかし、どのような内容を扱うかについては

19）「天神」はモンゴルの神話において「テングリ・ハイラハン」という地上を作った創造神として現れる。遊牧民の言う「テングリ／天／」は、宗教ではなく、神様でもなく、迷信でもなく、天／自然／の道に関する哲学である。(O. Lkhagva, L. Erdenetuya「永遠なる天と運命」モンゴル教育大学『Lavai』研究誌7号、2011年、p. 84)。天に関する概念は、モンゴル遊牧民の人生経験、自然観察、知恵により生まれたものである。(J. Bor『偉大で素朴なチンギス・ハーン』2005年、p. 20)。遊牧民のいう永遠なる天とは人間が共生する、生きとし生けるものの母胎・自然であり、人間・自然・社会が一体化した空間である（B. Jadambaa『信仰と人間発達』2007年、pp. 8-9)。チンギス・ハーンの時代も天を崇拝していた。『元朝秘史』によると、1203年にチンギス・ハーンが「青い天」（天神）という概念を述べている。国章には仏教やモンゴル民族の伝統のシンボルが組み込まれている。国章の中には青色の地があり、モンゴル人が崇拝してきた天を象徴している。今でもモンゴル人の民間信仰の中に息づいている。朝、ミルクティーを天に供えたり、お酒を飲む前に指を酒に浸け、天の神と地の神に向けて指をはじき、最後に自分が飲む習慣がある。

20）天界に存在する99の神々

21）正月の後、寺に行き、あるいは僧侶を家に招き、自分や家族の生年月日と性別により、新しい年に必要な仏教経典（病気、厄払い、家族内不和、勉強、新居の運気など）を読経してもらう。

22）http://www.president.mn/mongolian/node/753（"Монголын уламжлалт сэтгэлгээ, арга билгийн ухааны үндэс" сэдэвт нээлттэй хэлэлцүүлэгт иргэдээс ирсэн саналууд）

様々な意見が見られる。代表的なコメント[23]を以下に紹介する。

Sh. チョイマ（Sh. Choimaa、モンゴル国立大学教授）：「モンゴル人の思想、文化の基礎であるモンゴル語、習慣、宗教の伝統を学校において教授することは喜ばしいことである。チベット基金が長い年月をかけて１億トグルグを投資し中学校用に『モンゴルの伝統的な倫理の基礎』と『心を清める』、高校用に『仏教の基礎』という３冊の教材を作成し各学校に配布している。これらの教材をこの授業で活用して頂きたい」。

D. アマル（D. Amar、モンゴルベテラン講師連盟会長）：「外国の発展を真似しようとする傾向が強くなっている。この機会を利用して公務員試験や入学試験で、民族文化についての試験項目を設けたほうがよい」。

D. スフバートル（D. Sukhbaatar、気象環境分析研究所顧問）：「モンゴル人の伝統的な思想という領域に「モンゴルの伝統的な仏教の倫理・教え」という内容を盛り込んだほうがよい。伝統的な宗教について仏教の倫理、釈迦の説いた八正道[24]、十戒[25]、十善戒[26]、空、因果の道理、因縁生起について取り上げたほうがよい」。

Ts. ウヌルブヤン（Ts. Unurbayan、モンゴル国立教育大学教授）、D. バトトグトホ（D. Battogtokh、教育研究所研究員）：「大地[27]と天の神様を崇拝する儀式、「九九天」、モンゴル民族は天から生まれたというような概念は、モンゴル人の誇りとして大事であるが、立証できない伝説を誇りにすることは問題であり、東洋思想の「内の五明」・「外の五明」なども子どもには難しすぎる。ただし、各家族が自分の祖先に祈りを捧げる仏教の礼拝対象を置き、それを媒体として子どもに正しい信仰を教えることが大事であり、学校、寺院、民間の協力を強化する必要がある」。

B. オトゴンバートル（B. Otgonbaatar、Sanjaabadid 寺院僧侶）：「イギリスの人道的組織である「チベット基金」が仏教に関する３冊の教材をモンゴル語で作っている。公民教育の教材が開発されるまで、これらの教材を使ってほしい」。

このような肯定的な意見もあれば、以下のような批判的な意見もある。

P. ラハム（P. Lkham、モンゴル科学アカデミー研究員）：「モンゴル人の伝統的な文化を多く取り上げており、民俗に関する教科になっている。モンゴル人の思想という教科名からみれば哲学的な教科とも判断できるが、項目を見ると伝統・慣習が圧倒的に多い」。

P. ダリフー（P. Darikhuu、モンゴル国立大学教授）：「モンゴルの思想は伝統・慣習に限らない。モンゴルの陰陽の基礎という教科名も子どもに分かりにくい。指導内容についても子どものニーズを踏まえた調査が必要である。モンゴルの哲学を勉強しなければ教えられない内容になっており、教師養成についても検討する必要がある」。

23）Citizens'Hall/Office of the President of Mongolia/「モンゴルの伝統的な思想、陰陽の基礎」教科のカリキュラム案に対する提案」2010年５月17日、pp. 1-10（http://www.president.mn/mongolian/node/753）

24）悟りに至るための実践手段。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念および正定からなる。

25）仏教において僧が守るべきとされる10ヶ条の戒律（不偸盗、不邪淫戒、不淫戒、不妄語、不飲酒、不塗飾香鬘、不歌舞観聴、不坐高広大牀、不非時食、不蓄金銀宝）

26）仏教における十悪を否定形にして戒律としたもの（不殺生、不偸盗、不邪淫、不妄語、不綺語、不悪口、不両舌、不慳貪、不瞋恚、不邪見）

27）自然とともに生きてきた遊牧民は大地の恵みを受けて生きていると考え、大地の神様を崇拝し祀ってきた。

D. ブムオチル（D. Bum-ochir、モンゴル国立大学教授）：「宗教に触れていると批判している人もいるが、モンゴル人の知恵の中に科学誕生前に形成されたものもあり、宗教の中に混じっているところもある。モンゴル民族の知恵が宗教の中に残されているともいえる。ただし、ここでいう宗教は仏教に限らない。指導内容については小中学校の先生はおろか、研究者も十分に理解できない複雑な概念が多くある」。

上記のコメントから、社会体制改革以降、社会全体がアイデンティティの危機に見舞われ混乱している中、文化、伝統・慣習を内容とした新しい公民教育の実施に向けて人々の意識が高まっている様子が伺える。それには、社会主義時代、粛清[28]などにより排除・禁止されていた宗教が、民主化以降、復興し、公民教育で議論の対象となるほど目覚ましい展開を見せており、一般社会でチベット仏教が医学、文学、教育、舞踏に始まって生活のあらゆる分野にまで浸透している歴史的事情や、国際化により多様な宗教を互いに認め合う考え方が促進されている事情も背景にある。このことが現在の公民教育のカリキュラムをみると、金剛手菩薩、開眼観音[29]、天や大地の神様を崇拝する意味[30]などを教えながら、自然環境を愛する心を育てようとしていることからもわかる。

また、経済成長に意識を奪われる一方、先進国の影響によってモンゴルの固有な文化・文明でさえ「同質化」されようとしていると危惧され、民族文化の知識を子どもに伝え、国民意識を鼓舞する必要性が叫ばれていたことも挙げられる。さらに近年、民族行事が行われなくなりつつあること、伝統と慣習によって保護されてきた自然環境が、急速に破壊されている現状も挙げられる。これらを背景にして、公民教育が伝統文化の回復、ナショナリズムの高まりとともに、民族主義を形成する手段として実施されるようになったのである。

これらの項目には自国のことをよく理解し、愛国心を育てようという意図がある。またモンゴル人の遊牧文化にある自然環境保護の思想を教え、自然に対する畏敬の念を持たせ、自然環境を破壊しない心を育てることが公民教育において重要な目標として掲げられている。

さて、つづいて教育文化科学省は2011年から「モンゴルの伝統的な思想、陰陽の基礎」教科の替わりに普通教育学校の第１学年から第12学年を対象とする公民教育の新しいカリキュラムを公布している。同カリキュラムは公民教育を実践に移していく指針とされており、モンゴル独自の公民教育のモデルとして理論化できるものである。公民教育で具体的には、以下の知識、能力、態度を育てることを目標としている。

・民族の伝統的な思想、文化的価値、慣習を尊重するとともに、実生活で活用して、次世代へ伝え発展させることのできる、民族的自覚や民族文化に対する誇りと愛情

28） 1922年から始まり1937年に強行された政治粛清によって、700近い寺院が破壊されている。

29） モンゴル教育文化科学省『12年制普通教育学校における公民教育第（第４学年から第12学年）カリキュラム』2011年、p. 2

30） モンゴル教育文化科学省『12年制普通教育学校における公民教育第（第４学年から第12学年）カリキュラム：第９学年の伝統的な生活習慣に関する項目』2011年、p. 13

を持つ公民を育てる。

・伝統・慣習、権利を守り、正義を尊重し、強い責任感を持った、積極的で創造的な公民を育てる。

・身・口・意、すなわち行動・言葉・心遣いにおいて成長した、コミュニティー参加の知識を持つ文明化した公民を育てる。

そうして、初等教育課程の公民教育で「期待される成果」として、以下のことが設定されている。

・あいさつ、尊重、感謝に関する伝統的な習慣を身につける ・身・口・意による善悪の行為を区別し、善行を身につける ・睡眠、食事、服装を正しく整え、習慣付ける ・自分の父方と母方の親戚を知り、尊敬する ・土地、土壌、土、山、水、植物、動物を大事にし、保護する習慣を知り、身に付ける ・家畜の種類や分類を知り、名づける伝統的文化習慣を知り、活用する	・正月、男性の三つの競技（ナーダム）、民族祭の習慣、礼儀作法を知り、習慣付ける ・自分と他の子どもの違いを知り、尊重する ・自分の長所・短所を明確に認識し、自己成長への意欲を高める ・自分と他人の安全に気を配る ・自分の権利と義務を自覚し、実行する ・周囲の人々へ礼儀正しく接し、支援を受ける

以上の「期待される成果」から公民教育の役割は、人格の形成、能力の開発、知識の伝授、文化慣習の継承など幅広い範囲におよぶものであり、「社会的価値観を共有し、日常生活の様々な問題や社会問題に対する解決策を模索・実行し、より良い社会を創り、運営するための学び」であることが理解できる。また、その目標から伝統的慣習による自己成長と社会参加を融合しようとする特徴をみることができる。

4．現在の公民教育の内容構成と特質

ここで公民教育の「伝統・慣習」の領域を取り上げ、この教育の実施を通じて「公民的資質」を涵養しようとする内容構造の分析を試みる。「モンゴルの伝統的な礼儀作法、習慣、生活様式、知恵などの伝統文化に関する知識を学習者に与え、生活で応用できるように習慣付け、民族文化を大切にするモンゴル人としての倫理観を持った、人道的、民主主義的な素養をもつ公民を育成する」[31] ために、現在の公民教育のカリキュラムに以下の内容が盛り込まれている。

すなわち、モンゴル人が何百年にもわたり受け継いできた、また今後も次世代に受け渡すべき価値観は、自然環境、家族、家系、母国、独立、国家制度、伝統・慣習、産業、生

31)　モンゴル教育文化科学省『12年制普通教育学校における公民教育第（第４学年から第12学年）カリキュラム』2011年、p. 2

活様式、知識、学問、権利、自由[32]、母国語とモンゴル文字、モンゴル民族の性格、人間性、先人や高齢者の尊重、父母愛、いたわり、国民統合、馬頭琴[33]、長唄[34]、ホーミー[35]、モンゴル民族舞踊、ナーダム[36]、チンギス・ハーン、その知恵と教え、モンゴルのゲル[37]、民芸、エルデニゾー寺院[38]、オルホン渓谷の文化的景観[39]、岩絵、金剛手菩薩、開眼観音、放牧型の畜産[40] などである。

上記の内容は、モンゴル国政府によるモンゴルの伝統文化、無形文化遺産の保護に関する決定[41] と、人道的、民主的な社会に生活する公民が自ら積極的に国政に参加する自由や権利を行使し、国家の意思決定過程に参加し、自分の立場を表現する能力を開発し[42]、自主的に社会参加ができる、社会的責任感の高い公民を育成する社会的ニーズに応えたものである[43]。

初等教育、前期中等教育、後期中等教育課程における公民教育は、「伝統・慣習」と「現代の公民」という二つの基本領域から構成される。これら二つの領域の割合について表１で示した。「伝統・慣習」に関する領域は「人格形成」、「伝統的な生活習慣」、「民族遺産、民族の誇り」という下位項目を抱え、一方「現代の公民」の領域は「公民の自己修養、能力」、「公民の責務」、「公民と国家の関係」という下位項目を抱えるかたちでそれぞれ構成される。

公民教育は12年制の普通教育学校の各クラスで28～35時間、12年間通算で406時間が設けられている。以下、表２で各学年で割り当てられた時間を示した。

---

32) L. Dashnyam「世界のモンゴル人の歴史と文化-現在」国際学術会議報告書、2010年

33) モンゴルの弓奏の弦楽器。馬の弦楽器（モリン・ホール）という。棹の先に馬の頭が彫刻され、胴体には馬の皮を張る。弦、弓毛ともに馬の尻毛を束ねてつくる。楽器の起源・装飾・材料すべてが馬に由来している。モンゴルで最も重要な楽器で、一般牧民も広く所有している。日本の小学校の教科書に「スーホの白い馬」の伝説が紹介されている。

34) 自由なリズムでこぶしを効かせながら張りのある声で歌う。歌詞は馬を讃える唄や、恋の唄であったり、故郷を思う唄であったりすることが多い。日本の追分とか馬子唄によく似ている歌い方で 、音域が裏声も含め３オクターブにもおよぶ。

35) 一人の人が一つの声門から高さの異なる二つの音を同時に出す音楽。アルタイ山脈周辺民族の間に伝わる喉歌と呼ばれる歌唱法の内、西部オイラト諸族に伝わるものの呼称。一般に、緊張した喉から発せられる笛のような声のことを指す。

36) 民族の祭典である。モンゴル相撲・競馬・弓射の三つの競技が行われる。ナーダムはモンゴル各地で行なわれるが、最も大きいものが国家主催のナーダムと呼ばれるもので、毎年７月11日の革命記念日にちなんで、７月11日から３日間、ウランバートルで開催される。モンゴル民族としての一体感を共有する意味合いもある。

37) 伝統的な移動式住居。中心の柱によって支えられた骨組みをもち、屋根部分には中心から放射状に梁が渡される。これにフェルトをかぶせ、屋根・壁に相当する覆いとする。壁の外周部分の骨格は木組みで、簡単に折り畳むことができる。内部は、直径４～６ｍほどの空間である。南向きにして立てられる。西側が男性、東側が女性の居住空間である。

38) 16世紀末に建立されたエルデニゾー僧院は、モンゴル国で最も古いチベット・モンゴル仏教寺院であるとともに、モンゴル帝国の首都カラコルムの跡地に造られたため、13世紀から現在に至るまでのモンゴル史全体に関わる貴重な歴史遺産となっている。

39) オルホン渓谷はモンゴル中央部のオルホン川両岸に広がっている渓谷。首都ウランバートルの西方約360 km に在る。その渓谷の文化的景観は、2000年以上にわたって培われてきた遊牧民の伝統を例証するものとして、ユネスコの世界遺産に登録された。

40) O. Purev「公民教育の必要性」教育研究誌、2011年

41) モンゴル国大統領「モンゴルの伝統的な思想、陰陽論の基礎」授業に関する2010年第103号礼、教育文化科学大臣の2011年第84号令

42) Civics education for the twenty-first century http://portal.unesco.org/education/en 2006.08.26

43) モンゴル教育文化科学省『12年制普通教育学校における公民教育第（第４学年から第12学年）カリキュラム』2011年、p. 2

図表１　「公民教育」内容編成

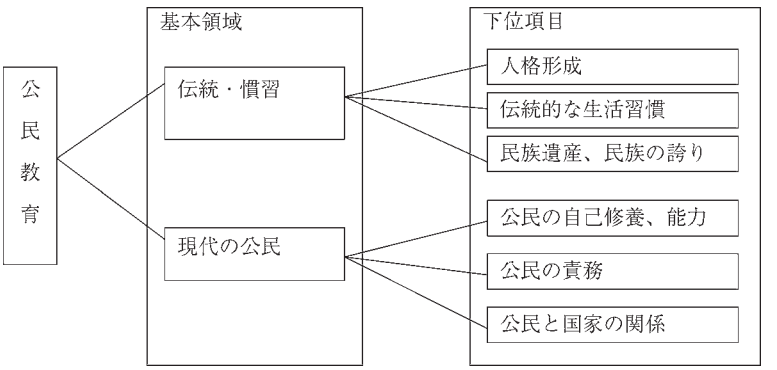

表１　初等教育、前期中等教育、後期中等教育における公民教育の二つの領域の割合

教育課程	初等教育	前期中等教育	後期中等教育
伝統・慣習	70%	50%	30%
現代の公民	30%	50%	70%

表２　各学年における公民教育の授業時間

教育課程	学年	時間数		総時間数
		伝統・慣習	現代の公民	
初等教育	1	19	9	28
	2	22	10	32
	3-6	23	11	34
前期中等教育	7-9	18	17	35
後期中等教育	10-12	10	25	35
合計		92	72	164

「伝統・慣習」の領域は、初等教育で７割を占めているが、学年が上がるにつれて授業時間が減り、後期中等教育では３割に圧縮されている。

公民教育は教室内と教室外活動を通じて実施される。カリキュラムによると教室内学習活動では、学習者のニーズ、興味・関心、発達の特徴に対応した伝統的な遊びや礼儀作法を習慣付けるための役割演技、討論、デスカッション、意見交換会などを開催し、インターネットなどによる情報収集・分析、遠足、模型作成、感想まとめ、メモ作成、他人とのコミュニケーション構築などを実施する。教室外の学習活動は、地域の歴史、文化、習慣、礼儀作法に関連する観光名所、行政機関、公民社会の組織を訪問する修学旅行、小規模プロジェクトの企画、博物館見学などを実施する。これらの活動を「人間と社会」、「母国語」、「音楽」などの教科の内容に関連させながら、連続性・一貫性をもって計画的に実施することになっている。さらに、①学習者のニーズ、コミュニティー参加、選択、体験活動を基本とする、②相互尊重、③共同活動を強調している。

教師については小学校では担任の教師、中学校・高校では歴史と社会科の教師が担当する。公民教育の成否には教師の専門性、指導法の技能、能力が大きくかかわる。また、教師の人生経験、モンゴル民族の伝統・慣習、価値観に関する教師自身の知識と信念が重要な要素となる。なぜならば公民教育の狙いは他の教科と違って、アカデミックな科学的知識というより、むしろモンゴルの文化、伝統の価値観を紹介し習慣付けることにあるからである[44]。

2011年に教育文化科学省は公民教育の教科書、学習者用CD、教師用参考書を作成している。公民教育の評価は「初等・前期中等学校の学習者の知識、能力、人格発達の評価に関する規則」に基づき、第1学年から第3学年で「非標準的な評定」、それ以上の学年で「標準的な評価」を行う。「非標準的な評定」とは、学習者が習得すべき知識、能力、人格の変化を記すものである。一方、「標準的な評価」とは知識、能力、人格の変化を学習者の認知的レベルに応じて「合格」か「不合格」かを判定するものである。そこでは学習者の習得した知識と能力の使い方、生活、他人に対する態度が重要な基準となる。

以下に「伝統・慣習」の領域の特徴を、上で示した「人格形成」と「伝統的な生活習慣」および「民族遺産、民族の誇り」という下位項目に従ってまとめる。なお「現代の公民」に関する領域については、本論文では割愛する。

（1）「人格形成」の内容

カリキュラムをみると、「人格は個々の立ち居振舞い、人と接する態度で発露される。モンゴル人は早寝早起きで、知識を重んじる気質を持ち、高齢者を尊重し、その言葉や教えを聞くように小さい時から子どもをしつけてきた」[45]としている。この「人格形成」の領域は①人間関係に関する伝統的な礼儀作法、②家系と自己を知る、③身・口・意による行為という一貫性のある三つの部分から成り立っており、学習者にモンゴル人の大事にすべき習慣を身に付けさせることを目的としている。

初等・前期中等教育課程において「人間関係に関する伝統的な礼儀作法」の項目では、挨拶、尊敬と感謝の心、謝り方、民族的統一、協調性重視の伝統、他人の欠点の指摘方法、他家へ訪問する際の習慣、接客の習慣、国家と法令を尊敬する習慣を教授することになっている。「家系と自分を知る」に関する項目で、モンゴル民族、民族の分布、居住地域、特徴などを知り、尊敬する意味、「自分を知る」ことについて、自分の名誉を大事にする意味、「自我」 を知り、自分の「内心」を見つめる（話す・行動する前に考え表現する、自分の短所、欠点を直す）方法、自己中心的な行動を慎み、利他性を重視し、家系を覚える（自分の家族構成を知る）意味、自分の家系図を作成し、親族がかかわる行事に参加することを教える。

44） モンゴル教育文化科学省『12年制普通教育学校における公民教育第（第4学年から第12学年）カリキュラム：第5章　教科実施可能性と教師』2011年、p. 22

45） モンゴル教育文化科学省『12年制普通教育学校における公民教育第（第4学年から第12学年）カリキュラム』2011年、p. 3

一方、「身・口・意による行為」に関する項目では、「大五明」と「小五明」という概念を取り上げ、声明、因明、内明、工巧明、医方明、呪術明、呪術などについて教えている。以下に「身・口・意による行為」について詳しく内容をみてみたい。この項目では、人間の身・口・意の本性、特性を知り、自己と他人を身・口・意の面で分析し、身・口・意の面で自己を啓発・修養する。人生の逆境を乗り越えるために身を鍛え、心の強さを身に付け、心を自制し、身・口・意を清め、意による悪行を捨断し、瞑想し、悟りを求めて努力し、生きているすべてのものに思いやりの心を持って接することについて教授している。こうして人間の行動を身・口・意の面で捉えている「人格形成」の内容はモンゴルの公民教育において非常に特徴的な内容である。

「人格育成」に関する内容は十善と十悪の構造に従って構成されている。人間の悪行について、殺生、偸盗、邪淫、妄語、綺語、両舌、悪口、貪欲、瞋恚という用語を用いながら、これらの概念に基づいて身・口・意による善悪行を分類し、定義している。この構造が小学校から高校まで一貫している。

次頁の表3から人格形成について総合的にみてみると、人として生きるための正しい考えや行為、普遍的な「人間としての在り方生き方」について明確に示されていると言える。「自分に満足し、他人のことを羨み妬まない、瞋恚、貪欲、横柄、嫉妬、無思慮（無知）など悪意を抱かない、行動に移さない、これらの悪意を抑制し、……」などと具体的に行うべきでない「悪（意)」を明示していることが特徴である。知識だけでなく、実践態度を培い、如何に行動・実践すべきかを考えさせる指導を試みていることがわかる。すなわち人格の発達を、知的側面と行動実践的側面という二つの側面から捉えていることがわかるのである。

「人格形成」に関する領域で、特に先祖に対して尊敬の念を育てることを目標とした特徴的な項目がある。それは先祖の生い立ち、家計図や家系に関する知識を重視し、家系をさかのぼって9代まで覚えさせ、家系図[46]の作り方などを教えている項目である。公民教育の教材には「歴史を分からない人は盲目と同じ。自分の家系を分からない人は家畜と同じ」[47]と書いてある。この項目には祖先の歴史や時代をさかのぼりながらその精神を明らかにし、子どもが自らの歴史的・社会的位置を知り、祖先からの血縁を受け継ぐ氏族の一員として、また同じ時代に生活をともにする家族の一員として、またはモンゴル人としての誇りと責任感を持たせようとする狙いがある。以下、表4で第3学年から第6学年まで学習する「祖先への敬意」に関する項目をまとめる。

この項目から一族の歩みが個人のアイデンティティ形成の基盤になるという視点が読み

46）　社会主義体制の下、氏族を表す姓は民族主義的であるという理由で廃止され、かわりに父称が導入された。1990年代から姓を復活させるために、国民の身分証明書に姓を記載するようになった。現在、モンゴル人の正式な名前は、姓＋父親の名＋本人の名の三つからなっている。現在、皆、姓をもつようになったが、日常生活の中では、姓はほとんど使われておらず、父称＋名が用いられている。姓の本来の意味は十分に理解されておらず、夫婦別姓、兄弟別姓もある。学校で祖先を9代目までさかのぼって覚えさせ、家系図を作成するよう指導している背景には、このような社会事情がある。

47）　モンゴル教育文化科学省『初等教育課程における公民教育のカリキュラムと提言：第1学年から第3学年』2011年、p. 11

表３「人格形成」に関する内容構成

公民教育における伝統・慣習	人格形成	意による善行を習慣付ける 瞋恚、貪欲、横柄、嫉妬、無思慮（無知）など 敵意を抱かない、行動に移さない、これらの悪意を抑制し、断ち切る習慣を身に付ける、正しい 概念、教え、教訓を信じる、より正しく認識するために努力する 意による悪行を自制し断つことを習慣付ける 瞋恚、貪欲、横柄、嫉妬、無思慮（無知）など 悪行を行うなど 正しい概念、教え、教訓を信じ、もっと正しく認識するように努力するなど 自分に満足し、他人のことを羨み妬まない、善行と悪行を否定する、父母、教師、学者の正しい教え、教訓を信じないこと（邪見）など
		身による善行を習慣付ける 偸盗（貧しい層を支援する、動物に餌をあげる など）、学びによる善行（自分の学んだことを他人に正しく教える）、安全行動（被災した動物を救護し、動物の命を助ける）、人の命と動物の命を助け、病気を治すために協力する、不殺生、残酷な人から動物を守る、被災地の動物を助けるなど 身による悪行を自制し断つことを習慣付ける 無意味に他人や衆生の命を奪うこと、暴力を振るい、撃ち殺す、他人の物を奪い取る、誰も見ていない時に他人の物を盗む、汚い手段を用いて他人の物を勝手に取る、自分に都合の良いように測定器の数値を偽造する、他人が落とした物を探しているのに隠す、偽物を売る（偸盗）など
		口による善行を習慣付ける 自分の言葉や話を熟慮し、どんな時でも正しい言葉遣いをし、人々の連携と友情を深めるためにできる限りためになる話をする、要領よく中身のある、話をする、他人に必要なものを手短にかつ明確に話す、他の人に良い印象を与えるようにやさしい言葉と表現を使う、人々の協調性や一体感を維持するために可能な限り、礼儀をわきまえて話す 口による悪行を自制し断つことを習慣付ける 盲語、両舌、綺語 、悪口（他人にわざと間違った概念を教える、他人の正しい考え方を間違った方向に導く、嘘の話を黙って認める、人を騙すなど）

表４　第３学年から第６学年まで学習する「祖先への敬意」に関する項目

小学校３年生	小学校４年生	小学校５年生	小学校６年生
人間関係に関する伝統的な礼儀作法を知る 父方と母方の血族３親等を覚え、尊敬する	自分の家系を５代さかのぼって覚え、尊敬する	家系を７代さかのぼって覚え、家系図を作成する習慣を身に付ける	家系図を作成する習慣を身に付ける（家系を９代さかのぼって覚える）、家の行事に参加する

取れる。先祖代々、子孫に語り継ぎ、継承してきた家の文化を大事にし、「先祖はこのような人だったのか」などと考えさせ、アイデンティティ形成に大きく役立てようとしている。先祖を敬い、先祖に恥じない生き方をしていくために、自分に何ができるのか、どのような生き方をすればよいのかについて、自己を立体的に深く見つめさせる内容になっているといえる。

（2）「伝統的な生活習慣」および「民族遺産、民族の誇り」の内容

伝統・慣習に関する領域は 「人格形成」のほかに、「伝統的な生活習慣」、「民族遺産、民族の誇り」という下位項目から構成される。以下、表5で第11学年と第12学年で学習する「伝統的な生活習慣」、「民族遺産、民族の誇り」に関する項目の内容をまとめた。

この領域は「モンゴルの食文化、モンゴルのゲル、畜産業を伝統的文化習慣である」とし、モンゴルの伝統的な生活様式、知恵、生活に関する習慣を身につける」[48] ことを目標としている。カリキュラムでは「モンゴル人の生活に関する伝統的な礼儀作法、習慣、遊牧文明は、延々と受け継がれるべき価値観である」と定義し、民族の文化・風習・思考の様式をモンゴル人の精神活動の表れとして、これを教材にしている。この領域は自国の民族文化を守り抜くことに重きを置き、これまでモンゴルという国家を築き上げてきた伝統と文化を尊重し、伝統・慣習に合理的な説明をつけながら、新しい国家の発展の基礎にしていくことを狙いとしていることがわかる。公民教育にこれらの伝統・慣習、行事が盛り込まれた背景には、学校生活の中で伝統的な文化や儀礼に対し子どもたちに教える、あるいは行事を一緒に行うという機会が減っているという事情も背景として挙げられる。

ここで挙げられている慣習や民族行事はモンゴル全国でその実施を確認することができる、一般的な伝統・慣習、行事である。

モンゴルのゲルの習慣、民族衣装、祭典、遊びなどは、いずれもモンゴルの文化習慣にとって基礎的なものである。特に、慣習、口承文芸などは学校が設立される以前から一般的に行ってきた道徳教育でもある。こうした点からも自国の文化を公民教育の中に取り入れながら学ぶことは、青年期の発達上の課題であるアイデンティティの形成においても非常に重要である。こうして、モンゴルの公民教育は自国民の日常生活文化の歴史を、民間伝承を主な資料として再構成しようとする民俗学とつながりが強く、民族遺産、民族の誇り、民族精神、国民性、母国語もそれぞれ重要な項目になっている。また、様々な民族習慣を子どもらに教えるにおいては、重要な習慣について「知っているだけでなく、習慣化する」、言い換えれば、知識に加えて技能としての民族文化をも習得したモンゴル人を望ましい人間像とする特徴をもつ。さらに、それらを単に理解するだけではなく、その学習を通して国の伝統・慣習や文化を大切にし、国を愛する心を育てることを目指していることがわかる。

さて、カリキュラムの内容分析から直接的に把握される上記の内容に加え、以下の教育的意義が認められるので、その考察を述べておきたい。

第一に、カリキュラムは社会参加意識を明確に植え付けるように内容が構成されている。つまり、この教科を通じて児童生徒の社会性の形成に大きな役割を果たす可能性があるということである。地域全体で行われる祭礼やあそびは他の人々との交流を促進し、地域社会での役割分担を知る機会となる。

48）モンゴル教育文化科学省『12年制普通教育学校における公民教育（第4学年から第12学年）カリキュラム』2011年、p. 4

表5「伝統的な生活習慣」および「民族遺産、民族の誇り」の内容

モンゴルのゲルに関する伝統的文化習慣	ゲルの組立と解体の習慣、ゲルにおける礼儀作法、ゲルを出入りする時の習慣
モンゴルの食事作法	乳製品、ウルム（クロテッドクリーム）、アーロール（乾燥凝乳）エーズギ（油をとったヨーグルトを火にかけ煮詰め少し焦がしぎみに炒めたもの）、チーズ、馬乳酒、ヨーグルトなどの作り方、食べ方、動物の肉料理の区別、正しい食べ方、野菜と植物（麦、粟、米、穀物、野菜ねぎ、ニンニク、Godoy、ゴヨ（芋科の野菜）、Allium plyrrhizum、Allium senescens、果物）を正しく使い、料理する方法、食品の加工度、食べ方、保存方法（家畜の屠殺、加工、肉の解体方法、干し肉の作り方、牛乳の作り方、保存方法）
民族の祭典の習慣	正月の習慣（正月用のお祝い料理、大晦日の習慣、挨拶の習慣、祝詞、縁起のよい言葉、元旦の習慣、元旦の挨拶の仕方、オーツの食べ方[49]、プレゼントの受け渡し、シャガイ[50]大会、足跡の行事[51]、正月の験担ぎ、節制の習慣など）
口承文芸	民族舞踊、叙事詩、民族芸術、モンゴルの昔話、伝説、なぞなぞ、ことわざの意味を例を挙げて説明・解釈し、話し合う、短唄、唄い方、叙事詩（地域ごとの叙事詩の歌い方、特徴など）、西部地域のハルハ、ブリヤド、東部地域の民族の舞踊の特徴、シャガイ大会と弓射競技のUukhaiの歌[52]、出走前に歌う歌[53]、モンゴルのホーミー（咽喉歌）、（ホーミーの種類、唄い方、技）
モンゴルの遊び	言葉遊び、子どもの会話の仕方を発達させる言葉遊び、早口遊び 熟語を覚える遊び、石、シャガイ[54]遊び、運動遊び、知恵遊び、運動遊びと遊び方（「夜間に木片を投げて取り合う遊戯」、「手をつないで並んでいる人々の真ん中を走り手を離せる遊戯」、指遊び、ボール遊び（将棋、碁、ぜんまい仕掛けの玩具、知恵遊び、遊び方（紐の結び目を解く遊び、リングを解く遊び、パズルゲームなど）
モンゴル衣装に関する伝統的文化習慣	儀式服と一般的な日常着の異なる点を知り、着付け方を覚える、民族衣装の飾り、装飾品の意味、象徴的意味を知る、民族衣装の作り方、技術（裁断、縫い合わせ、仮縫い、解き戻し、裁縫、刺繍、衣服のボタンをとめるための輪索の作り方）、季節や行事にふさわしい清楚な服装を着る習慣を身に付け、服装に関する験担ぎ、禁忌を知る
	遊牧民の習慣、家畜を大事にする習慣、家畜と自然環境との接し方、子孫に受け継がせる習慣、家畜の使用法、器具、子馬の調教方法や管理方法、

49) 羊の尾のついた胴体部分を丸茹でにしたもの。
50) 羊のくるぶしの骨を遠くの的に当てる男性しかできない競技。
51) 元旦の朝、新年の初めての外出に関する儀式「ムル・ガルガフ」を行う。生まれ年（十二支）と性別によって違う縁起のよい方向で縁起のよい仏教経典を読み、縁起のよいことをする儀式である。よい方向に進めば、新年の福を呼び、災いを祓うことができるというものである。いい方向とは人それぞれ毎年違うが、これは五行思想の火、水、木、土、金に基づき、空、山、気を加えた、この世を表す表によって決められる。火から始まり男性は時計回り、女性は逆時計回りに年齢の数を数えて、その年の「行」を決める。新聞に生年月日と性別で、どの方向に行ってどんな仏教経典を読んで、何に気をつければいいか、災（厄）を避けるためにどんな仏教経典をお坊さんに依頼すればいいのかを掲載している。お教はチベット語で書かれているので、発音を読むだけである。
52) モンゴルのナーダム祭で歌われる、射手に強さと勇気を与える歌。
53) 騎手の子どもが自分の競走馬に対し励ましと幸運を祈り、節をつけて言う間投詞。
54) 羊のくるぶしの骨で作ったもの。四つで1セットになる。大量に使って遊ぶやり方もある。ひとつのシャガイはそれぞれの四つの表面が形状によって「馬」「羊」「山羊」「ラクダ」と名付けられている。サイコロのように投げ、どの面が出たかで占ったり、コマ代わりのシャガイを双六のように進めたりする。

畜産業の習慣	荷物運搬用に利用する家畜の管理方法、鞍、おもがい、手綱、足枷、はづな（馬の首にかける一種の手綱）、あぶみ、馬車、牛車、燃料に使う家畜の糞を集めるのに使う籠、乳製品の容器、輪なわ（馬を捕えるためのもの）、ムチ、ゼル（家畜をつないで置くために地面に張って置く縄）ホム（ラクダの背の荷物の下に敷くフェルト）、オールガ（家畜をつかむ道具）、皮ぶくろなどの使い方、家畜に焼印[55]を押す習慣、初めて牝馬の乳を搾る際の儀式、家畜の区別、見分け、名付け、放牧方法、知恵、移動先・放牧地の選定、家畜が供給する畜産物、畜産業の習慣、畜産業の習慣（フェルトの作り方、ノグト（馬の口にかませるくつわ）チュドゥル（馬の３本足につける枷）の使い方、鞍を付けるなど
モンゴル相撲の取り組みと習慣	モンゴル相撲の称号、相撲の取り組み、力士を尊敬する習慣、力士を尊敬する習慣など
弓競技・競馬の習慣	馬の称号、馬の体力を回復させるために結びつける習慣、馬の道具を大事にする意味、６歳の馬の競馬の習慣など
子どもに関連する礼儀作法	子どもを洗う習慣、子どもを洗う日の選び方[56]、年配者を招待するお祝い会をする儀式、子どもの髪の毛を切る儀式[57]、祝詞、縁起のよい言葉を述べる意味、子どもに名を付ける習慣、縁起の良い名前を選ぶ
国民統合を大事にし、国家を尊重する習慣国旗、国章意味、縁起	「ハル・トゥグ」と「ツァガアン・トゥグ」[58]の意味、地方における 歴史、伝統文化を 誇りに思う、国家と国章の意味、縁起、陰陽の教えを知り（陰陽の教えはモンゴルの歴代ハーンたちが国民を冷静で丁寧に指導してきた国家政策の伝統である）、教えを受け継ぐ、国家を善く統治する、公務を誠実且つ公正に執行する、国家の名誉、国の法律を尊重する習慣を身に付ける
環境保全に関する伝統的な文化習慣	禁制の山や自然豊かな風景地を知り、誇りに思い、大切に保護する：（世界初の国指定保護山の一つである Bogd Khan Mountain や Otgontenger Mountain、Burkhan Haldun mountain、Sutai mountain、Khasagt Khairhan mountain、Khan Khukhii mountain、Subarga mountain など）、植物を保護する習慣（希少薬草、森林を保護する 伝統的な礼儀作法などを知り、活用する）、希少野生動物を保護する伝統的な礼儀作法、山、オボー[59]崇拝の習慣（天と大地の神様の崇拝、祀り方など）、自然が豊かなところを知り、保護する、大気汚染を防止する伝統的な礼儀作法（余計なものは燃やさない、家畜や動物に火をつけない、家畜を燻製にしないなど）、放牧方法、放牧に関する知恵・礼儀作法を知り、活用する（関連す

55）　焼印は自家と他家の家畜を区別するための「紋章」の役割がある。焼印には多様な種類があり、家庭により模様が異なる。馬に焼印を押す際に決まったしきたりがある。縁起の良い日を選び、親戚や隣家の人々を呼び、祝宴をする。焼印をハダグ（青い絹）に包み、大事に保管する。

56）　生後３～７日目に親族が集まり羊の肉の料理や乳製品、馬乳酒などを用意しお祝い会をする。助産婦が招待される。助産婦を「受け取りのお母さん」と呼ぶ。助産婦はお祝い会に３枚の帯とスワドリング（おくるみ）を持ってきて、赤ちゃんを洗う儀式を司会する。健やかに育てるために乳製品、薄いミルクティー、オーツの汁で洗う。

57）　男の子は３、５歳のいずれか、女の子は２、４歳のいずれかに初めて髪を切る。髪を切らないと短気で頭が悪くなると言われている。乳製品を来客に振舞う。来客が年順で祝詞を言いながら、子どもの髪を一房ずつハサミで切り、ハダク（青い絹布）に包み込む。

58）　馬の尻尾を夫々の９本の竿の先端に付けたもの。チンギス・ハーンの権力と帝国の象徴であった。ハーンの天幕の前に据えられ、ハーンの居場と国内の状況を表していた。トゥグの尻尾の色が白ければ帝国は平和であり、黒ければ帝国が戦時中であることを示していた。

59）　通常石または木で作られ、モンゴルの平原や平原にある小高い丘、あるいは山頂や峠のような高所に建てられることが多い。オボーはおもにチベット仏教の祭礼が行われる場所であるとともに、山岳信仰、テングリといった宗教的意味を示す役割を持つが、同時に境界標識や道標としての役割も持つ。オボーは、山岳信仰とテングリズム（天上界）のセレモニーにも使われる。

	る格言、ことわざの意味を話し合う
民族の伝統的な手芸	正月のお土産の習慣、彫刻、技芸、手芸（骨・角彫り術、牙、木、銀、金などの材料を使って作る工芸品）、彫刻・鋳造術（土、紙、さんごの彫刻など）、本を作る技術（巻き本、木、版や宝石を用いて本を造る技術など）
モンゴルの験担ぎ	数字と験担ぎ（数字の験担ぎ、１歳、13歳、25歳、37歳、49歳、61歳、73歳、85歳など、災難に遭いやすいと言われている年齢の特徴、「７」は忌み嫌われる数字とされているなど）、色彩と験担ぎ：（色の意味・縁起、色の美しさ、自然の色など）、方角と験担ぎ：（四隅、八方向、西が縁起のいい方角、東が縁起の悪い方角とされる）
有形財と無形財を受け継がせた人々、功労者、有名人	人間の本性（特性、行動など）と動物（強い４つの動物、「仲の良い４つの動物」[60]「幸せの８頭の馬」[61]など）形の験担ぎ、民族芸術を受け継がせた（長唄、ホーミー、舞踊）人々を知り、尊敬し、誇りに思い、彼らの伝説や教えを勉強し、自分を磨く、モンゴルの歴代ハーン（チンギス・ハーンなど）高官、活き仏（活仏）を知り、誇りに思い、彼らの伝説や教えを勉強し、自分を磨く、学者、愛国心の強い国民的英雄を知り、尊敬し、誇りに思い、彼らの伝説や教えを勉強する
有形遺産（歴史・伝統文化）	チンギス・ハーンの公民を大事にする教えを勉強する、歴史の痕跡、町、お寺、寺院の痕跡を知り、大事に保護する、歴史的建造物、文化遺産である寺院（カラコルム、エルデニゾーなど）を知り、保護し、誇りにする、歴史的文化遺産である仏像などの美術品（Undur Geghen Zanabazar[62]の作品など）、貴重な本、仏教経典などを知り、保護し、誇りにする
家族生活の習慣	家系や火を敬う習慣、家を大事にし、受け継ぐ、火の崇拝、よくおこっている灰火に灰をかぶせる方法（保ちをよくするために）、家を新築した時などに客を呼び宴をはる習慣、火による清め、火に供物を捧げる習慣と礼儀作法、家族の伝統的な礼儀作法（伴侶の選び方、婚約の儀式、結婚承諾の儀式、結婚の儀式、結婚し自分の家庭を作る、結婚生活、子どもができるプロセス、妊婦を大事にし尊敬する習慣、系譜の受け継ぎ、胎児教育など）を勉強し身につける。健康意識と「永遠不変のものなどない」ことを理解する：（家族皆で健康的な生活を送れる伝統的な生活習慣や、永遠不変のものなどないことを理解する、様々な原因により人が死亡すること、人の人生が短いこと、葬儀、喪の儀式など）習慣と礼儀作法をを知る
民族の伝統的な知識・知恵	モンゴル文字、文字文化（モンゴル諸民族の モンゴル文字の記念物、表現、使い方）、モンゴルの伝統的な暦法（太陽暦と太陰暦の区別、使い方、自分の誕生月・曜日、自分に相性の良い支と悪い支を知り、活用する方法を身に付けるなど）、小五明を知り、活用する（呪術明、呪術、比喩、舞、占星術）、大五明（因明、声明、医方明、工巧明）を知り、活用する

第二に、自然科学や生物学の教科と視点を異にした、精神的・文化的な側面から環境を再認識する環境教育の可能性が含まれている。伝統・慣習には石など自然物を用いた遊びも含まれており、また家畜の放牧と生産物、人間の生活との関連性を考えさせる内容も用意されている。自然環境に対する伝統的・文化的な知識や理解を深められるよう、自然崇

60) 樹になった果物をみんなで分け合い仲良く暮らす象、猿、ウサギ、鳥の物語。
61) 数字の８は、書きはじめ、書き終わりが繋がっていて切れていない、無限大という意味で縁起が良いと言われている。８頭の馬を書いた絵が人気で飾る家が多い。
62) ザナバザル（1635年～1723年）は、モンゴルの北部ハルハを本拠として活動した化身ラマの名跡の初代。

拝や祭祇儀礼に直結した項目もある。この項目では自然環境との一体感、生命の尊さや自然とのつながりを実感させる効果が期待される。そこに自然科学の教科などで教えられない、自然保護に関するモンゴル民族の精神的・文化的な習慣の意味づけがある。祖先が拠り所とした自然に対する畏敬の念を形成し、伝統文化保護の意識を育む上で大きな役割が期待されるのである。

5．むすびに

本研究はモンゴルの小学校・中学校・高校（複合学校の場合も多い）における公民教育の「伝統・慣習」に関する領域の特質を明らかにしながら、この公民教育のめざす目標と結果として期待される国民像について考察し、今後の課題の解明を試みた。

1990年代以降、モンゴルにて行われた社会体制の改革によって、学校教育を通じて育成される国民の青少年として一定の期待される姿を改めて描き出す論理が必要となった。そしてその論理が、今日望ましいとされるモンゴル人像の方向性を決定し、期待されるモンゴル人像の基準を構築している。そのモンゴル人像とは、公民教育のカリキュラムから判断すれば、モンゴルの伝統的な礼儀作法や慣習などに関する知識を持ち、これらを生活の中で応用でき、国家への誇りを持った、人道的、民主主義的な素養をもつモンゴル人である。したがって、公民教育はモンゴル民族の文化およびその遺産は青少年のアイデンティティに極めて重要な影響を及ぼすと同時に文化財を保存・保護、継承し、誇りに思う心は、モンゴルの持続可能な開発の一つの保証となるとみていることがわかる。これらを目標にして実施されている公民教育の特徴を次のように二つにまとめることができる。

一つ目の特徴は、民族文化や慣習を重視した内容になっていることである。公民教育は現代社会に過去から受け継がれているモンゴルの文化・風習、普段の衣食住や祭礼を習い、モンゴル人としての自己をみつめ、自覚する場として重要な意義を持っている。地域で行われている様々な社会生活上のならわしや風習や慣習、伝説、歌謡、民芸、言語や住居のあり方など、古くから伝承されてきた有形、無形の民族の文化を通じて、人間の望ましい行動を説明しながら納得させ、伝統的な思考様式を身に付けさせることを目的としている。民族行事には子どもを育み、自然環境を保護・維持する考え方を教える役割があり、子どもの社会参加意識の形成、自然愛、伝統文化の継承と保存といった教育効果を期待することができる。

二つ目の特徴は、「人格形成」に関する内容構成にある。カリキュラムは「人格形成」の領域で、子どもたちに「良いこと」と「悪いこと」についての判断基準を学ばせ、また集団生活や社会のルール等、きまりごとをしっかり理解させ、さらに正しい行いを身に付けさせるために、「身・心・口の行為における善悪行」を定義しながら、徳を積み、常に心を修養していくことの大切さを教授する内容となっている。また仏教における「内の五明」と「外の五明」に基づき、人格形成の内容を分類・整理し、因明、内明、工巧明、医方明、呪術明、符印明、呪符などの概念を取り上げながら価値体系化している。こうして

仏教的な価値観に基づいて児童生徒の人格形成を追及しようとしている点がモンゴルの公民教育において非常に特徴的である。この点を含めた「人格形成」についての価値体系化により、指導内容の共通性、指導の方向づけを明らかにし、人格形成の理念を示している。学年別の教育内容のつながりを分析すると「人格形成」の内容が低学年から上級学年へと発展・統合される形になっていることがわかる。価値観を共有化することが難しく「何が良くて、何が悪いのか」の価値判断がうやむやになってしまいがちな現代社会において善悪を明確に分類・整理している。

最後に、公民教育の指導内容について再考を要する課題として、以下の四点を挙げることができる。

公民教育には畜産業の習慣など、極めて社会科の科目で扱う内容と近い項目もあり、伝統や文化について扱っている国語科、「人間と社会」、「社会性」、「健康」、「人間と環境」などと重複しているところもあるが、本研究では「伝統・慣習」に関する領域を中心に取り上げたので、この領域の内容について問題点を指摘したい。

一つ目の問題は、現実との関連性の問題である。生活に必要な民族行事の知識・技能を、体験を通じて学ぶ機会をもたせることが有効である。しかしながら、公民教育で取り上げている民族行事や遊びの中には、地方では今なお生活に染み込んでいるものも多い一方、都市の生活では一般的にもはや実施されていない、あるいはその片鱗も見られないものがあり、子どもの生活からかけ離れた慣習が過度に強調されている現実がある。

二つ目の問題は、科学的に裏づけされていない慣習を児童生徒に教えてしまいかねない教育項目にある。習慣的に避けたりすること、あるいは縁起が良いと言って歓迎されることを教える「験担ぎの習慣」は、昔から社会生活の中に根付いているモンゴル人にとっては大事な生活の習慣である。しかし、モンゴルの伝統的な見方、あるいは知識として教えるのは良いが、科学主義的な立場からは問題がある。たとえば、モンゴルでは「７」は「運が下がる」という意味があり忌み嫌うが、科学的な根拠なく教えられている。また、数字、色彩、模様、方角の験担ぎがある。さらにモンゴルの現代生活におけるさまざまなマナーや習慣は、もともとは宗教的な意味合いをもつ「験担ぎ」から始まったものが多く、今となってはモンゴル人としての常識（たとえば、正月の揚げ菓子を下から「幸せ・不幸せ・幸せ…」と数えながら、必ず奇数段積み上げること、またその他さまざまな冠婚葬祭のマナー等）として一般化している。それらは「知らないと恥をかく」、あるいは「知っていて当然」とみなされるものもあるため、民族文化に関する学習内容として教えていくこと自体は意味がある。それでも、教育は文化の伝達である、という側面に注意を払いながら、知識レベルではこれらを紹介することはよしとしても、価値観とこれを体現する行動レベルまで学校教育で教えることは慎重な検討を経た上で行わなければならない。この例をはじめとして、今後、モンゴルではその伝統文化の継承をどのように行っていくかということが総合的に大きな課題になる。

三つ目の問題は、宗教的な情操教育の教育内容にある。

伝統行事や文化は、宗教的儀礼と密接な関係にあり、宗教的な事柄としてそれらを排除

することは伝統文化の継承を途絶えさせる原因になるという危惧もある。しかし、学校教育において、たとえそこに自然保護の習慣を受け継がせるという大事な目的が込められているとしても、まだ価値観が固まっていない小学生に対して仏教的な価値観（宗教的慣例）を前面に出して教えていく、という方法を選択しているのは問題ではなかろうか、との指摘もある。そのような指摘をする人々からは、加えて自然との関わりについては、客観的な事実や事象として知識レベルで学ぶことにまずは重点を置かなければならない、との意見も聞かれる。いずれにしても今後とも、伝統・慣習、民族行事は公民教育で有効な素材として注目されるであろう。その際に、民族文化としての宗教的事項（天・大地の神様、自然崇拝儀式など）を如何に適切に指導するか、授業づくりの基本的なポイント、指導上の注意点など、指導方法に関する基本的な考え方を確立する必要がある。

四つ目の問題は、国際理解、他との差異を強調する概念が欠如している点にある。

現在の国際化・国際交流が進展する中では、道徳教育や公民教育で取り扱う内容が、その国の事柄だけに絞ることができない状況がある。世界全体がさまざまな民族によって構成されている中で差別化されるモンゴル民族としての固有なアイデンティティは大切であるが、それは異文化の人々と主体性をもってかかわるためでもある。一方、その主体性が他の人々のアイデンティティに対して排他的・閉鎖的であるとすれば、世界の中の一市民としての公民を育てるという公民教育の視点に照らし合わせた場合、そのことが実は公民教育として本末転倒な結果をもたらす恐れがある。公民教育に期待されるものは「一国の担い手」としての公民を育てるという側面だけはない。それよりはるか以前に、地球上で一個の生を受けた一人の人間としての普遍的な地球市民の側面があり、次に世界が互いに協調的な国際関係をもつ二百カ国に近い諸国で構成された中で、モンゴルという一国の市民権を持つ立場での公民観を育てる目的がある。それらの前提に立った上で、これから世界で活躍するモンゴル人を育成するために、世界で通用する精神を育み、モンゴル文化や精神の素晴らしさをどう発信していくか、そうしながら異なる文化をもつ世界各国の人々とどのようによりよい世界を築いていくかというテーマにも取り組むべきである。

個々人の意志と全体の合意を大切にする公民性の育成とは、学習者自身の主体性と意見表明、そして、合意へと至る民主的なプロセスを経て意志決定をすることの重要性を学ぶことである。それは、単に価値を上意下達的に植え付けるのではなく、互いの利害と論理を披露し、相手の立場に立って理解し、合意に至るというプロセスである。だが、モンゴルにおける公民教育に関する課題の一つは、民族主義や自国の文化や習慣を大事にする排他的愛国心を涵養することに傾注しがちだという点である。つまり、他者理解の基礎となる異文化を尊重する態度を育成するという視点が欠けているのである。

もともとこのような学習のカリキュラムの内容と教育方法に関する研究自体が数少ないほか、諸外国との比較研究があまり進んでいないのが現状であり、今後も考察を重ねていく必要がある。

参考文献

教育文化科学大臣の2012年５月３日付け第 A208号令「12年制普通教育学校の第４学年及び第５学年の公民教育の内容」

政治教育アカデミー「公民・投票者教育 調査報告書」2007 年、ウランバートル

第５回新生・復興民主主義国際会議の決定を実施するプロジェクト「民主主義国家の条件：モンゴル国の現状と評価」2006年

Citizens'Hall/Office of the President of Mongolia/「モンゴルの伝統的な思想、陰陽の基礎」教科のカリキュラム案に対する提案」2010年５月17日 ttp://www.president.mn/mongolian/node/753)

Sh. Sukhee『モンゴル民族の伝統的な教育と発展の問題』1988年

モンゴル教育文化科学省『12年制普通教育学校における公民教育第（第４学年及び第12学年）カリキュラム』2011年、ウランバートル

モンゴル教育文化科学省『初等教育における公民教育カリキュラムと手引き（第１学年及び第３学年)』Inter-press 出版、2011年、ウランバートル

モンゴル教育文化科学省『初等教育における公民教育のカリキュラムと手引き』Selenge-press 出版、2012年、ウランバートル

モンゴル教育文化科学省『公民教育（第１学年）教科書』Munkhiin useg 出版、2012年、ウランバートル

モンゴル教育文化科学省『公民教育（第４学年）教科書』Ekimto 出版、2012年、ウランバートル

モンゴル教育文化科学省『初等中等教育スタンダード』Sod-press 出版、2003年、ウランバートル

モンゴル国大統領「モンゴルの伝統的な思想、陰陽論の基礎」授業に関する2010年第103号令

モンゴル教育文化科学省『初等教育課程における公民教育のカリキュラムと提言：第１学年から第３学年』Inter-press 出版、2011年、ウランバートル

(キーワード：公民教育、公民的資質、ナショナル・アイデンティティ、ソーシャル・スキル、民間伝承と学校教育、伝統主義)